

2017年11月28日(火)

オリサバ登山に向けて出発

今日からオリサバ登山が始まるが、初日のは登山基地までの車の移動だけなので、ガイドとホテルで落ち合うのは正午となっており、それまでの空いた時間を市内をジョギングしながら回ることにした。2時間半ほどジョギングしてからホテルに戻り、しばらく休憩してからチェックアウト清ませる。そのままロビーに居ればよかったのだが、このホテルはロビーは上の階にあってソファもないが、一階には軽食の店が多数あって、共同のテーブルがあるので、そこで食事しながら待っていれば、ガイドは一階からロビーに上がるだろうから、エレベーターの前で大きな荷物を横に置いた私を見つけられるだろうと考えてしまった。

ところが、正午を過ぎてもガイドは一向に現れない。30分を過ぎるころから少々焦り始める。電話をしようにも、メールでやり取りをただけで迂闊にも電話番号を聞いてなかったので、連絡をしようにもその術がなかった。ガイドと会えない最悪の事態も考え、その場合は帰国までの間はどうか時間をつぶそうかなどと思案もしたりした。とにかく1時まではこのまま待つこととし、その後のことはその時に考えることにした。

1時ちょっと前になってようやくガイドが現れて不安が解消することとなった。ガイドはずっとロビーで待っていたとのこてなので、一瞬キツネにつままれたような気になったが、地下の駐車場に車を止めてエレベーターで直接ロビーに上がるという私の「想定外」の行動のために合流ができなかったわけだ。私もロビーを覗きにいこうかなと思ったこともあったが、一階を通過してないのだから、ロビーには行っていないことを確信していたし、ロビーに出るとスタッフと直面するの

で、事情を釈明するのも面倒だという気持ちもあってロビーに確認に行かなかったのは失敗であった。

反省としては、ホテルでの集合場所をはっきりと決めておかなかったことがあげられるが、今回のホテルのロビーが待ち合わせには不向きであるということも二拍車をかけてしまった。また携帯の番号をお互いに知らなかったということも不注意であった。なにはともあれ、若干の遅れで出発できたことを喜ぶたい。

ガイドは私以上に英語が不得手のようであるが、タブレットにはオフラインでも使えるスペイン語も含めた各国語の辞書があるので何とかなるだろう。

道はメキシコシティ市内では渋滞が続いたが、郊外に出ると片道三車線の高速道路を快適に走れるようになる。ここで目を疑ったのは路側帯を自転車は何台も走っているではないか。アメリカで同じこてをやった時はバトカーに捕まってしまったが……。極め付きは柵を乗り越えてヒッチハイクを試みたり、車線の間立って物を売っている者までいることである。まさに所変わればなんとやらである。

メキシコシティに次ぐ大都市であるプエブラの街が近づくと、噴煙を上げるポポカテペトルが見えてくる。メキシコ第三位の高峰で、メキシコシティから比較的近いこともあって、かつては日本からもツアー登山が盛んに行われていた記憶があるが、最近火山活動が活発化しているために登山禁止になっているようだ。

プエブラを過ぎると、メキシコ第二位の高峰であるイスタシワトルが見えてくる。円錐形の美しい山である。間もなく車は高速道路を離れて二車線の道に入る。しばらくして車は右折してオリ

サバ登山の基地となるトラチェチュカを目指す。前方には目的の山である。オリサバの全容が見えてくる。こちらも円錐形の美しい山で八合目？付近から上は雪で覆われている。今夜は約2500メートルのトラチェチュカの宿舎に一泊し、明日は4230メートルのピエドラ・グランデ小屋まで車で上がってから登山活動開始となる。



ベースキャンプとなる小屋

2017年11月29日(水)

高所順応ハイキング

今日はベースキャンプとなる4200メートルにある小屋まで行くのかと思ったら、そこよりもやや低い4000メートル弱の高さまで高所順応を兼ねたハイキングを行って、また昨夜泊まった宿舎に戻ってくるとのことである。富士山くらいの高度は今までの経験の蓄積でほぼ順応ができていたので、高度の影響が出やすい睡眠時以外にはわざわざ出かけてもあまり効果はないのだが、郷に入っては郷に従えで大人しく従うことにした。好天続きで予備日も必要なさうだし、早く下山したからと行って特別行きたいところがあるわけでもないのに、田舎で1日多く過ごすのも悪くはないか。そんなわけで朝食も9時と遅めの時間となった。朝食を待っていると一人の若いクライマーが入ってくる。こんな時間に何かと思ったら、今朝登頂してここまでパラグライダーで一気に飛び降りてきたそうである。凄いヤツがいるものだ。

朝食後には小屋まで荷物を回収に行くさきほどのクライマーと一緒に車に乗り、途中で待っていた地元の案内人の所で私だけが下車して、案内人に連れられて標高差600メートルほどを登り、標高3900メートル弱のオリザバが正面に見える所まで登った。高度の自覚症状は全く見られなかったので順応は取りあえずは問題ないようだ。

下りは別コースから降りて車の通れる道(と言ってもかなりのダートだが)に出たが、迎えの車は来ていないようだ。待ち時間の最初は汗をかいて暑かったので日陰に入っていたが、そのうちに汗が引いて寒くなってきたので、日向に移動する。

かなり待ってから車が来たが、下からではなく上からだったので妙だなと思ったら、とうに下に降りてしまったと思っていた朝のクライマーも乗っているではないか。こんな時間まで、上で何をしていたのか聞きたかったが、語彙が不足していたので、聞かずじまいであった。

その晩は若いクライマーと一緒に食事だったが、見知らぬ人との会話は日本語でも疲れるのに英語ではなおさらだった。



ベースキャンプの小屋まで

当初の予定よりも1日遅れでベースキャンプに向けて出発できることとなった。今日もいい天気だ。明日の午前中一杯は天気もってくれることを祈る。

今日は小屋まで上がるだけだから急ぐことはないのだが、なかなか姿を現さないガイドにイライラする。同宿していたパラグライダーの人も先に降りてしまう。これで宿に泊まっている人は私以外にはいなくなる。

11時に宿舎を出発し、途中でガイドをピックアップする。初日に宿舎まで連れてきてくれた人はガイドではなく単なるドライバーだった。本物のガイドは私より英語が堪能なので意思疎通には問題はないだろう。その先でさらにもう一人乗り込んでくるので何かと思ったらコックであった。どうも今回も大名登山になりそうである。

13時に4200メートルのベースキャンプとなる小屋に到着し、コックの料理でランチを食べるが、食欲も旺盛であり、脈拍も67／分とほぼ正常の範囲内である。唯一問題があるとしたら、カメラが低温のためローバッテリーとなり、充電もできないことである。先日の富士山でも同じ現象が生じたが、どうも低温に弱いカメラのようである。とりあえずはカメラは抱いたま寝袋に入れて充電し、行動中はバッテリーは抜いて胸ポケットに入れて体温で暖めておこう。まあタブレットの方のカメラ機能には今のところ問題はないようなので、登頂写真なしという最悪の事態はまぬがれそうだが……

今はまだ午後3時頃で、普段は寝る時間ではないが、深夜に頂上を目指して出発するので、もうしばらくしたら仮眠をとることになるだろう。



ベースキャンプとなる小屋

2017年12月1日(金)

登頂ならず

3時出発とのことであったが、零時前に目が覚めてしまったので、カメラの低温によるバッテリー低下の対策を試みていたら、なにかの手違いでデータが全部飛んでしまった。タブレットでも結構撮っていたので写真なしという最悪の事態は免れることができたが、どうも朝から幸先の悪いスタートとなった。

3時きっかりにガイドと一緒に登り出すが、どうも調子が出ず一時間の登高高度が200メートルに達しない。一昨日の高所順応トレーニングをもう少し高い所でやっていれば多少違っていたのだろうが、そんなことを言っても始まらない。今のスピードでは1500メートルの標高差を1日で往復するのはとても無理だと薄々感じ始めるが、とにかく頑張っ登るしかない。

登りだして5時間たって、ようやく頂上直下の急な雪の斜面に達する。同宿していた人からデインジャラスなアイスバーンだとは聞いていたが、まるで冬の富士山のような山で、私が今までに登ったヒマラヤ、アンデス、アルプスの中で、こんなに危険な所は初めてだ。

ガイドとはコンテ(ロープで結びあいながら同時に行動すること)で登るが、こんな硬い氷の斜面をコンテで本当に止められるのか疑問を感じるものの、富士山のように突風があるわけではないので、アイゼン技術さへしっかりしていれば、まずは滑落はしないものだ。

100メートルほど登ったところでガイドが降りようと言い出す。頂上が目と鼻の距離ならば頑張る気も起きるが、もう少し頑張ったところで時間切れで戻らざるをえないことは明らかなので、同意して下山することになった。下りも結構たいへんだったが、2時には小屋に戻り、そこから車で2時間ほどでトラチチュカの宿舎に帰った。夕食まではしばらく時間があつたのでトラチチュカの町を散策するが、片田舎だと思っていたのは大違いでなかなかの町並みであった。

今回登頂できなかったのは、直接的にはアイスバーンのためだが、本当の理由は頂上アタック時の標高差が1500メートルもあつたためだろう。私くらいの年齢になると1000メートル以

内に抑えないと無理なのかもしれない。



